

小学生が米作り会社を設立

—労働とその対価を得るしくみを体験して金銭感覚を培う金融教育—

金融教育の現場レポート

「金融教育」は、社会の中で生きる力を育むことを目的として行われる教育です。このコーナーでは、金融教育の授業がどのような進められているか、教育現場に立つ先生や、授業を受ける生徒の姿をレポートします。今回は、茨城県神栖市立横瀬小学校の山本良信教頭が実践してこられた、農業体験を「米作りの会社」作り発展させた金融教育の取り組みについてご紹介します。

稲作地域の子どもたちなのに 農作業体験なしの疑問から

茨城県南部の穀倉地帯で教鞭を執る山本良信先生は、かねてから、5年生の農業を学ぶ授業での「バケツ稲」の栽培に疑問を抱いていました。

「現代っ子の遊びといえはやっぱりゲームです。この地方は祖父母が農業を営み、親は会社勤めで土日に農作業を手伝う3世代同居の家庭が多いのですが、田んぼは危険地帯扱いされ、子どもたちが足を踏み入れることはありません。実際に農作業体験は皆無という子がほとんどなんです。しかし、私が小学生の頃は仲間と一緒にウサギの子を仕入れ、育ててから売るとか、イナゴや小魚を捕まえて小遣いにするなど、それが自然の中の遊びの一つでした。小遣い稼ぎのためには、仲間と話し合ったり

大人と交渉することも必要です。そんなふうには自然の恵みを濃密な人間関係で分かち合う経験をしなから、金銭感覚も身に付けていったように思います。現代っ子の生活はこれとまったく違うことを残念に思っていました」。

子どもたちの自然離れや人間関係の希薄化が問題にされ、その対策が議論されていた平成11年、山本先生と同様の意見を持つ大人たちから「本場なんだから、米作りは本物に近いことをやらせよう」との賛同と協力を得て、最初の「米作りの会社」の実践がスタートしました。

小学5年生、米の生産販売を 目的とした会社を設立

山本先生の「米作りの会社」の実践は、平成11〜13年度の3年間は稲敷市立新東小学校で、次の学校では



茨城県
神栖市立横瀬小学校
山本 良信教頭

米作り会社 年間スケジュール(最初の年)

作付け計画 種籾の購入 耕起作業見学(トラクター)
苗作り 種まき 芽だし プール式苗代 育苗
代掻き(しろかき) 田植えのための線を引く
田植え 社長が他の学年にも依頼し、参加してもらう。社長から 祖父母に応援をお願い
草取り 他の学年、父母、祖父母に依頼をお願い。無農薬栽培 のために必要な作業
水管理 当番で管理
稲刈り すべて手刈りとした。全校児童で一日かかってしまった
乾燥 粳すり 協力者の農家で乾燥。粳すりの後、自動精米器で精米 し、学校へ
販売計画 市場調査 売値の決定 役割分担 インターネットで全国販売 ちらし配布
販売 新聞にインターネット販売が取り上げられ、朝から注文 のメールが殺到した ・インターネットの注文→宅配便で発送 ・学校で直接販売
収益の使途 全校アンケートを実施し、使途を決定。アンケートは社 長が責任を持って集約
遊具の設置 社長が外部業者と交渉を行い購入・工事手配まで担当
決算報告



産業祭では対面販売を体験しました

有志のみの参加で2年間、平成17〜19年度は行方市立行方小学校で3年間、いずれも教頭として若い担任教諭をサポートしながら、計8年間におよびます。5年生の児童数は多い年で12〜13人、少ない年には7人しかいない年もありました。最初の取り組みは、2反歩(約20アール)の田んぼと機材を提供してくれた保護者が、技術指導も担ってくれました。

実践のポイントと狙いは、以下の5点です。

- 自然との触れあい
 - 人間関係(教師や親以外の社会人との接触を含めて)
 - 金銭感覚の醸成(労働と金銭を結びつける)
 - 自ら考え判断し行動する
- 授業は4月中旬から。1時間目は「農家はなぜ農業をするのか」は「生活するために金を稼ぐ」という導入を行い、「本格的な農業でお金を稼ぎ、稼いだお金を皆で決めたことに使ってみないか？」と教師側から子どもたちに提案。同時に保護者の方々を招き、農業について、「どんなことをやっているのか?」「良いこと悪いことは?」「将来性は?」などの質問に答えていただくことにより、理解と興味を深めていきました。
- その後、「作業を通じて収益を得て、それを活用するにはどのように進めたいか?」「費用はどうするか?」などを詰めていくうちに、「会社組織を作ろう」「社長を決めよう」など議論が発展していきました。これが最初の「米作りの会社」設立の経緯です。
- 代表が社長で、会計、宣伝部長を置き、仕事が増えることに部長を増



○自分(達)で稼いで自分(達)で遣う

種まきしろか～代掻き～除草～稲刈りとていねいに作業を進めます。時には地域の方々からお茶の差し入れもありました



労働の対価が現金に 身に付く金銭感覚

やすことに。もちろん、これらの役を担うのは、すべて生徒です。社長は絶対的な権限を持ち、収益の所有権は社長にあるものの、あまり身勝手な時は組合を結成し、ストライキをするなど、会社のルールをさまざまに取り決め、スタートしたのでした。

稲作は、小学5年生の子どもたちにとつては、かなりきつい作業です。田植えと稲刈りの際には、社長が手紙を書いて協力を仰ぎ、他学年の児童や祖父母、地域の大人たちの助けを借りました。そのお礼として収穫後に現物(米)で丁寧にお返しをし、

販売して得たお金は現金を机に並べ、その用途を皆で話し合いました。

「最初の年は、自分の意見を通そうとした社長が皆の反対に遭い、全校でアンケートした結果、校庭の遊具を購入することになりました。次の年は皆でバス遠足に行く資金に。自分たちに給料を払った年には、『使うことができず、ずっと取つてある』という子もいました。『自分たちで稼いだ大切なお金』という気持ちがあったのでしよう。また、どの年も節約を心がけていました。無駄なお金を使わない、できるだけ安く事業を行う、経費は予算内で抑える、そういう意識は最初から高かったようです」。

山本先生は毎年、子どもたちの取り組み方法に違いはあるものの、

労働の対価としての金銭感覚の醸成には大きな効果があったと感じています。

また、最初の年の子どもたちは地域だけでなく、インターネット販売も行いました。その取り組みが小学生新聞で紹介されたこともあり、全国から注文が殺到するなど、売上は絶好調。900kgほどを半日で売り切つてしまう勢いでした。ほかにも宣伝部長を中心にPR活動を行い、ちらしを配つたり、知人に電話をかけたり、市場で販売するなど、大人顔負けの販売戦略を行っています。

コシヒカリとマンゲツモチなど良質な米を、「環境にやさしい無農薬有機栽培で作ろう」付加価値がついて高値で売れる」という発想も、勉強

して情報を集めた子どもたちから生まれてきました。

環境が子どもたちを変え、教師も変える

子どもたちが自然に親しみ、人間関係を密にし、地に足のついた金銭感覚を培うという視点で、大人でなければできない、子どもの環境づくりに挑戦した山本先生。

「教師からやらされる授業は『面倒くさい』『いやだ』となります。この取り組みも、4月にスタートした時点では教師主導で進み、子どもたちにも積極性は見られません。ところが、リーダーを育てることで組織が機能していきます。教師がリーダーに知識を与え、先の見通しや目的を持たせることで、子ども自身が子どもを動かすことができます。リーダーへの意識付けを行うことで、考える力、人に説明したり説得をする力、プレゼンテーション力まで身に付いていくんですね。教師は子どもを力に過小評価せず、もつと成長を促す環境を設定して、モチベーションを上げてやれば子どもたちは予想以上のこ

とを成し遂げるはずなんですよ」と力説します。

販売体験を通して、知らない大人が褒めてくれたり、自分たちの行為を認めてくれる体験、苦勞して作った自分たちのお米が現金に代わる感覚。この「米作りの会社」は、机上の授業では味わえない成功体験や金銭感覚を育むうえでとても貴重な「生きるための学び」が詰まった授業にほかなりません。

「社長になったガキ大将タイプの男の子は見違えるように人の意見を聴くようになっていきましたし、私と一緒に遊具業者と価格交渉をし、現金で支払いをするという経験も彼を大きく成長させました。また、対面販売を行った子どもたちは声をかからして呼び込みに一生懸命で、口上を考えて暗記し、5分以上もしゃべり続ける子や、ご飯を炊いて試食販売している姿も見ました。意欲付けに成功すると、子どもは教師が考えている以上に自分の能力を自ら高めていく。そん

な子どもたちを見ていると、本当にワクワクするんですよ。それが教師の醍醐味ではないでしょうか」。

「教師が変わると子どもが変わる」と同時に、「子どもが変わる姿を見て、教師も学び変わっていきます」という山本先生。その生きた教訓を、ぜひ今後後進の教師たちに伝えていきたいと、語ってくださいました。



農家の方に初すり(稲の実から初穀を取り除く作業)をしていただいた玄米を学校に運び、その30kgの玄米袋をみんなで抱えながら階段を登り教室まで運び、積み重ねました

金融教育の現場レポート

小学生が米作り会社を設立

— 労働とその対価を得るしくみを体験して金銭感覚を培う金融教育 —

茨城県

神栖市立横瀬小学校 山本 良信教頭